K－704

天童市埋蔵文化財調査報告書第６集

乱川・杉壇

緊急発掘調査報告書

１９９３

天童市教育委員会

序　文

この調査報告書は、天童市北部土地区画整理組合による土地区画整理事業にともない、天童市教育委員会が主体となり、当該組合及び天童市都市計画課の協力の下に実施した「杉壇」発掘調査の結果をまとめたものです。

今回の調査は、土壇状の小丘が何であるかを解明しようとしたものであり、出土品こそありませんでしたが近世初頭の人々による信仰の一端を垣間見ることができました。

また、調査の中で旧家から乱川の故事来歴を記した文書の提示を得たことは、土壇解明に大きな手掛かりになりました。

杉壇は、開発にともなって公園に姿を変えることになりますが、記録に残すに止どまらず、親しまれてきた「杉壇」の名を何等かの形で後世に伝えるような配慮が望まれるところです。

最後に、調査に当たって格別の御協力をいただきました地元の方々をはじめ、関係各位に対し、心から感謝を申しあげ序の言葉といたします。

平成５年３月

天童市教育委員会
教育長　横田光正

調　査　要　項

1　遺跡名　杉壇
2　所在地　山形県天童市大字乱川字東原１４１７番地
3　地　目　原野
4　所有者　小座間周松
5　調査理由　土地区画整理事業による宅地化のため
6　調査主体　天童市教育委員会
7　調査体制　調査員　川崎利夫（主任）　長南憲一　村山正市
作業員　天童北部土地区画整理組合（高島巌太郎理事長）
事務局　天野英彦（社会教育課長）山口勝雄（同課長補佐）
今川文俊（同文化係長）渡辺幸子（同主査）
調査協力　天童市都市計画課

例　　言

1　本報告書は、天童市教育委員会が平成４年度に実施した大字乱川字東原における、杉壇の緊急発掘調査の概要である。

2　山形県遺跡地図には登録されていないが、平成２年度に実施された分布調査によって、緊急調査による記録保存の必要が生じた。

3　発掘調査は、平成４年４月１８日・１９日の両日に実施したが、それ以前に事前調査を行っている。

4　本報告書の本文執筆は、川崎利夫があたり、図面作成は主として村山正市、第３図のみ長南憲一が行った。写真は、川崎、今川によるものである。編集は、事務局の今川文俊が行った。

目　　次

1　発掘調査に至るまでの経緯 …… 5ページ

2　位置及び地形 …… 5ページ

3　杉壇の調査の概要 …… 7ページ

（１）外形と伝承 …… 7ページ

（２）調査の方法 …… 9ページ

（３）発掘調査の所見 …… 9ページ

4　結　言 …… １４ページ

挿　図　目　次

第　１図　乱川杉壇位置図 …… 4ページ
第　２図　杉壇付近現況図 …… 5ページ
第　３図　明治７年山口村地図抜粋 …… 6ページ
第　４図　杉壇の遠景（写真） …… 8ページ
第　５図　発掘作業状況（１）　（写真） …… 9ページ
第　６図　発掘作業状況（２）　（写真） …… 9ページ
第　７図　杉壇土壇現況図 …… １０ページ
第　８図　土壇及びトレンチ設定図 …… １１ページ
第　９図　杉壇土壇東西断面図 …… １２ページ
第１０図　杉壇土壇南北断面図 …… １３ページ
第１１図　土層断面（写真） …… １３ページ

第１図　乱川杉壇位置図

1　発掘調査に至るまでの経緯

天童市においては、昭和６３年１０月から天童市の北部地区の乱川集落の東側、押切川の北側一帯について土地区画整理事業を実施することになった。従来の畑地や果樹園、荒蕪地に道路を縦横にきり、側溝を造り全体を平坦にして宅地化を目指すものであった。

事業は天童市北部土地区画整理組合が担当して進められたが、これに先立ち埋蔵文化財保護の立場から、山形県教育委員会文化課によって分布調査が行われた。その際、事業区内に「杉壇」と呼ばれている塚があることが注目され、天童市教育委員会に緊急発掘調査を実施するよう要請があった。これらについての協議が事業主体と市教委の間で行われたのは、平成２年から３年にかけてである

市教委では調査団を編成し、平成４年４月１８日、１９日の両日、地元や土地区画整理組合の協力を得て緊急発掘調査を実施する運びになったものである。

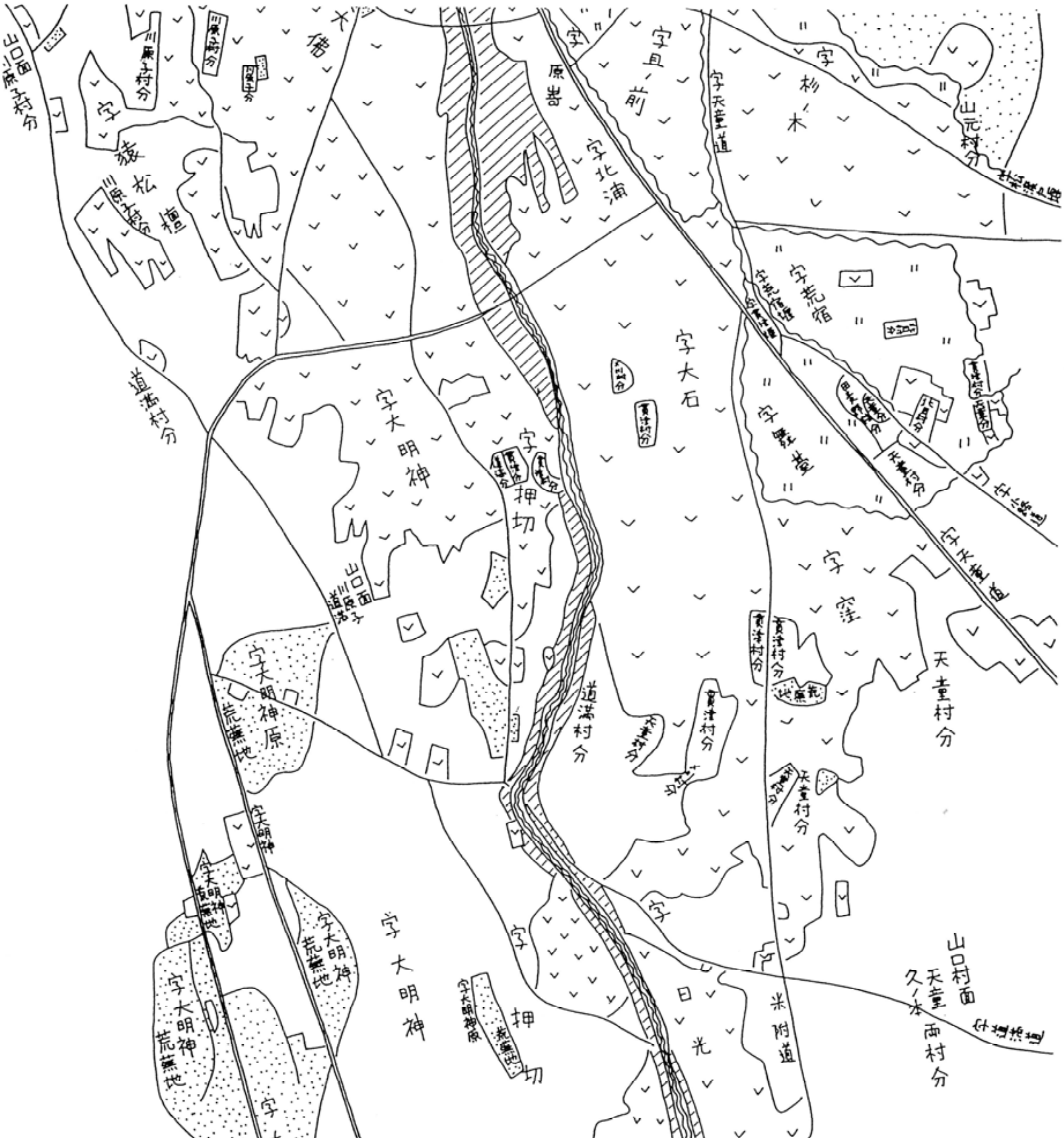
2　位置及び地形

調査地の杉壇は、天童市大字乱川字東原１４１７番地である。（第１図）

奥羽山系に源を発し乱川に合流する押切川と、天童市と東根市の境界を流れる乱川は並行して天童市北部を西流するが、それに挟まれたところに乱川の集落がある。両河川の距離は約１.４㎞、これを南北に跨いで旧羽州街道が通り、それに添って細長く発達したのが乱川の集落である。もともと乱川は、川原子集落の西に在ったと伝えられ、江戸時代初期に羽州街道の整備にともない現在地に移住させられたものという。元禄１０年（１６９７年）の「東

第２図　杉壇付近現況図

第３図　明治７年山口村地図抜粋



根領覚書」（横尾文書）によれば当時の家数は１９軒であった。

杉壇は、乱川集落のすぐ東にあり、旧国道１３号線（羽州街道）から東へ１２０ｍの地点にある。付近はかつて水田や畑地及び荒蕪地が広がっていた。現乱川集落の東側一帯が「大明神」という地名で、現在道満集落にある春日神社がこの地にあったといわれるが、その地を特定することはできない。春日神社は、１２世紀藤原氏の荘園であったころ勧請したものと伝えられる。

大明神とその周辺からは、鉄製の直刀等がそれぞれ地点を異にして発見されている。これらは墳墓に副葬されたり、呪的な祭祀儀礼に用いられたものであろう。出土地は次の通りである。（「天童市史別巻上」１９７８年）

・乱川字大明神　　（小川善作氏蔵）
・乱川字大明神　　（新源寺保管）
・乱川字東原　　（佐藤欣一氏蔵）
・道満堤防　　（小川善作氏蔵）

乱川と押切川に挟まれたこの地はかつて不毛の原野であり、集落を営むには不適な地であったため、古代、中世の集落跡はない。

杉壇のすぐ南を東西に通る古道ある。「成生道」といわれているが、成生荘の中枢部であり荘家などが置かれていた大清水から成生をへて旧関山街道を横切り、古くから地域の人々の信仰を集めていた若松寺に向う道である。この道に沿ってこの塚があるのは偶然ではない。おそらく古道にそって築かれた信仰上の塚であったのだろう。（第３図）

３　杉壇の調査の概要

（１）　外形と伝承

現状では塚の頂部は一部削りとられ、原形をとどめないほど周辺も破壊を受けている。現状では不整円形で、北西と南東にややひろがり、頂部は平坦であるが若干盛り上がり、よせ集められた土によって東西２箇所がわずかに高い。塚の裾部からの高さは１．２５ｍで、塚の南下方に杉の木が１本立っている。

かつての塚のようすを知っている方々の話からも、もっと大きくて高さがあったといわれ、頂部には杉の古木があったので「杉壇」と呼ぶ名が一般的になったが、かつては「首塚」または「文珠塚」とも呼ばれたことがあった。

第４図　杉壇の遠景

そして罪を犯した者の首を埋めたとか文珠の首が出てきたなどの言い伝えがある。杉の大木の下に文珠をまつる祠があったのは確かであると思われる。

乱川の大泉正美氏が所蔵する村の故事来歴を記した文書に、この塚について次のような記載がある。明治３０年代に書かれたものと思われる。

「　　第六　勝地古蹟

本村ニ於ル勝地古蹟ハ少モ萬代橋稲荷神社文珠塚也稲荷神社ニ付ハ既ニ概畧ヲ述タリ乞フ読者文珠塚ノ由来ヲ聞ケ開墾サレタル畑ノ中ニ高三間モアラント思フ小丘アリ其中央ニ一ツノ直径五尺余ノ老杉ノ跡株アリ是ハ昔文珠様ノ首ヲ埋メシ処ト聞ク其ノ中ニ何ヲ埋メシカ知ニ由ナキモ人工ニヨリ築カレシ事明カナリ多分古戦場カ蝦夷カ又藩主ノ関係アル境界ナランカト察ラル近世ニ至ル迄其杉生存セシカト古木ノ下トテ空洞ニナリ居シヲ以テ時々乞食ノ宿トナレルカ乞食ノ焚火ノ為焼失セ今ハ只杉ノ古株ノミ残居レリ亦此ノ近傍ノ地ヲ其ノ丘名ヨリ字杉壇ト称スルナリ・・・」

これによると文珠塚というのが正しく、後に杉壇と称するようになったが、明治中期には杉の古木は失われ切り株だけが残っていた。高さ３間ばかりというが現状ではかなり削平されてしまったことになる。（第２図・第３図・第７図）

（２）調査の方法

調査にあたっては、①出土遺物の有無　②人工の塚かどうか　③塚築造の方法として特別なものがあったかどうかの諸点を探ることにした。

いずれ失われてしまう塚であるので、塚を断ち割る形で幅１．５ｍ・長さ１２ｍのトレンチを設定して、上部から土を取り除く手作業で実施した。４月１８日に旧表土下の砂礫層に掘り下げ、断面図を作成して作業を終えた。　翌１９日は午前中雨模様であったが、今度は塚上部から南側に向かって幅２ｍ・長さ６ｍのトレンチ掘りを行った。塚の中央部には、かつてあった大木の根が張っていたので一部重機の力を借りたが、断面を整理し図面に記録して、ほぼ完全な調査を実施することができた。（第５図・第６図・第８図）

第５図　発掘作業状況（１）

第６図　発掘作業状況（２）

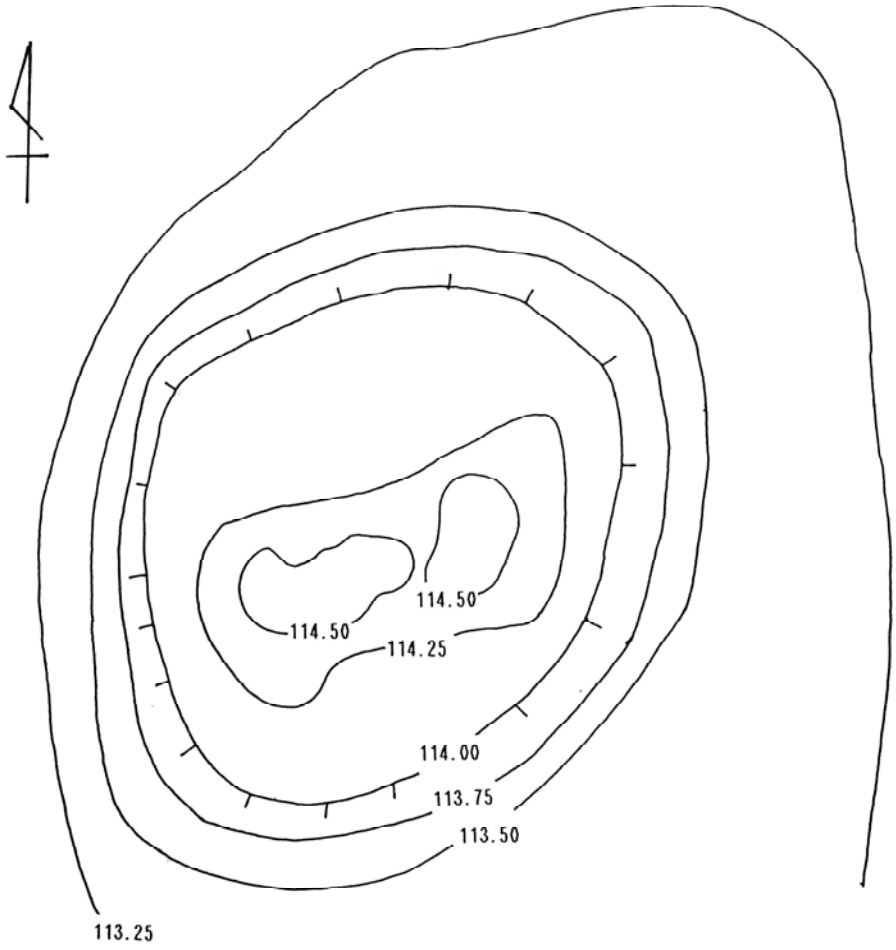
（３）発掘調査の所見

東西のＡトレンチでも南北のＢトレンチでも、塚の一部を掘り下げて上部から埋納施設を設けたような痕跡は、全く認められなかった。ただＢトレンチにおいて、塚の頂部に大木があったことを証明する、大きな木根が掘り起こされた。しかもそれは杉の木根の最下部であり、その上には１ｍ以上の土の堆積があったことを示し、塚上部はかなり削平されたことを証明している。

土砂の堆積状況からみて、塚頂部はかなり平坦であったと思われる。３０㎝の表土自体が削られた塚の内部の土である。その下に暗褐色粘質土が続くが、明確に一層ずつ突き固めながら積み上げていく版築の技法は用いられず、周辺から集めた残土をほとんど無造作に積み上げていったようであり、崩れや形を整えるための特別の地業は行われていない。

塚を築き上げた当時の地表は、Ⅳｂ層の上部であり、黒褐色粘質土に砂や礫が混入する。この層の上に、砂や礫を混えない壌土が積み上げられたのである。塚の内部はほとんど、砂や礫を含まない良質の土壌である。

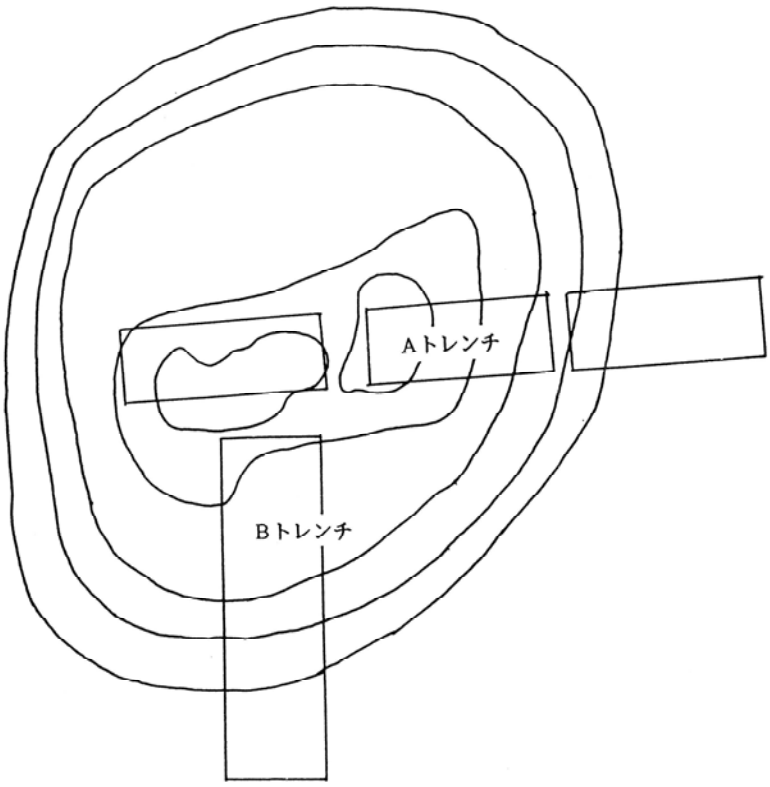
第７図　杉壇土壇現況図



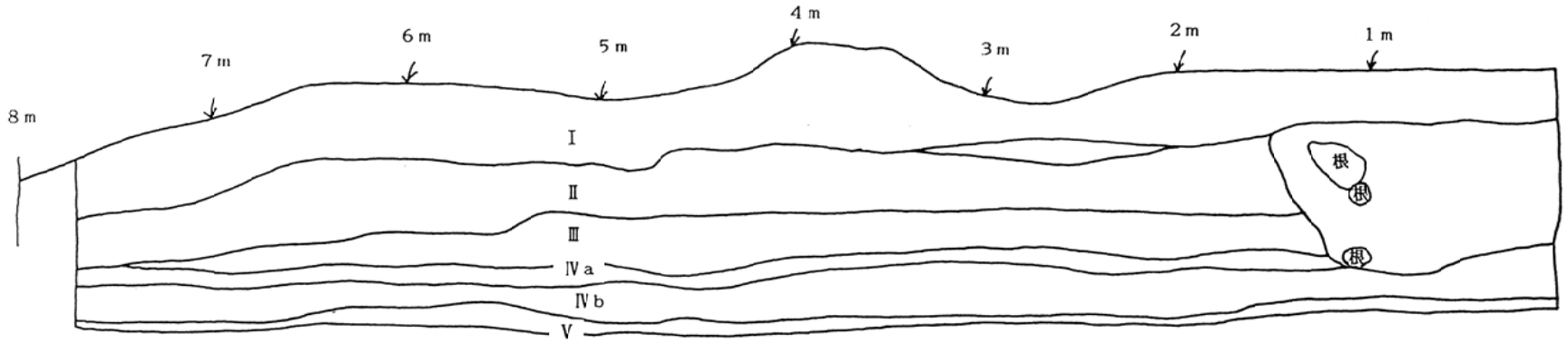
当時の地表下２５～３０㎝で、扇状地や河岸段丘にみられる黄褐色の砂礫層に達する。

以上により杉壇は、当時の地表にほとんど整地地業を施すことなく、周辺から掻き集めた黒褐色の黒ボク様の土を無造作に積み上げて、ほぼ円形に作られた。今よりも若干大きく径２０ｍ以上はあろうか。高さも今より２倍以上あったことは確かで、記録によれば３間もあったという。頂部は杉の古木があり平坦であったということができよう。（第９図・第１０図・第１１図）

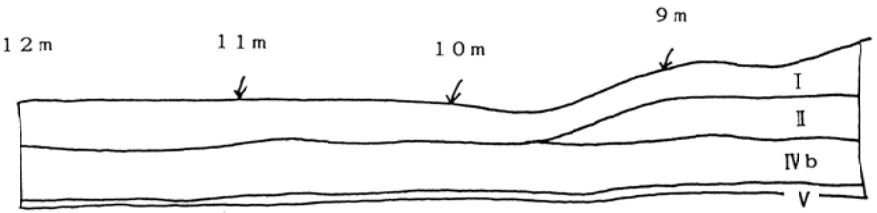
第８図　土壇及び
トレンチ設定図



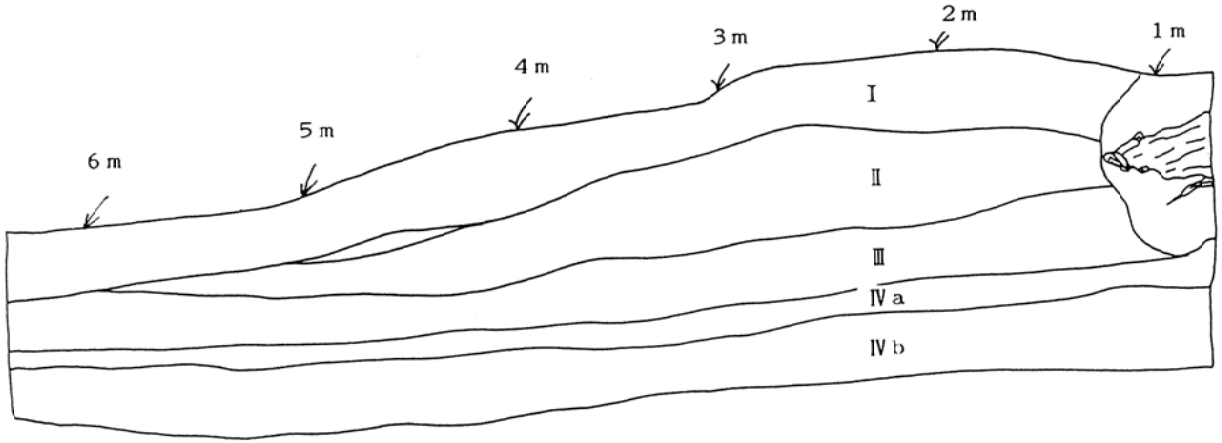
第９図　杉壇土壇東西断面図（Aトレンチ）



Ⅰ　層　表土（暗褐色粘質土，有機質）
Ⅱ　層　暗褐色粘質土（しまりがあり茶褐色土が混じる）
Ⅲ　層　暗褐色粘質土（Ⅱ層よりもやや暗色）
Ⅳａ層　黒褐色粘質砂（Ⅳｂ層の前位層）
Ⅳｂ層　黒褐色粘質礫砂（Ⅳａ層に人頭大から握手大石と砂が混じる）
Ⅴ　層　暗黄褐色礫砂（地山）



第１０図　杉壇土壇南北断面図（Bトレンチ）



第１１図　土層断面

4　結　　言

中世や近世には、信仰上に由来する様々な塚が築かれた。信仰とは無関係の境界を示す塚や一里塚などもあったが、杉壇は勿論これにはあたらない。頂部に大木があり、文珠の祠があったとすれば、当然信仰上の理由をもって造られた塚であり、人工の盛土であることは歴然としている。

信仰上の塚には、塚の内部に何らかの埋納を主とする墳墓や経塚などもあるが、塚の上に奉載を主とする修法壇、供養壇、浅間塚、富士塚、庚申塚さらに塚上に石塔や石祠を据えるための土壇もあった。

昭和６１年に天童市教育委員会において緊急発掘調査を実施した大字川原子中原における土壇は長方形を呈し、高さ２ｍの上部に板碑を立てるために築き上げられた土壇であると考えられる。（天童市教育委員会「川原子１号土壇発掘調査報告書」１９８６年）

杉壇は塚内部の土層に壙を設けたような痕跡は全く認められなかったので、墳墓や経塚のように塚内部に埋納するために造られた塚ではない。

文珠塚という伝承のように祠をすえ、その傍らに杉の木を植えたと言う、むしろ祠を祀るために築かれた塚ではなかったかと思われる。それは少しでも地表面より高ければ、霊験があり功徳があったのである。だから依代としての杉の木が植えられ、それは天に向かってやがて伸びるようになった。

そしてこれが旧街道から若松寺へ向かう参詣の古道に築かれたことにも意義があったのである。その築かれた年代は近世初頭と考えられる。恐らくそれ以前は近くに人家のない場所であったが、近世初頭に初めてここに乱川の集落が発生した。その頃、人々の守護神として塚が築かれ、文珠菩薩が祀られるようになったのではないだろうか。

遠い祖先の思いを残し、歴史の跡をわずかに止どめる杉壇が、いま新しい開発のために失われようとする時、その様相を記録に止どめて調査の事実を永久に伝えようとするものである。

天童市埋蔵文化財調査報告書第６集

乱川 - 杉壇

緊急発掘調査報告書

平成５年３月
発行　天童市教育委員会
山形県天童市老野森
一丁目１番１号
印刷　大　風　印　刷